

かけがえのない 1 週間

神戸大学医学部附属病院 上田 優

平成 25 年度海外研修派遣としてスタンフォード大学での Summer Symposium on State-of-the-Art-Imaging に参加させて頂いた。以下、与えられたテーマに沿って、報告させて頂く。

1. 本研修に期待した事とその成果

本研修に参加した主な目的は、最先端の技術の把握と研究の方向性の確認であった。Molecular imaging や 7.0T MRI の可能性、実際にスタンフォード大学病院で行われている cardiac MRI & CT, breast MRI の話を聴講することができ、5 年後、10 年後の MRI の方向性が垣間見え、最先端技術の情報を収集することができた。スタンフォード大学の先生方から多くの事をご教授頂いたが、私が特に注目したのは巧みなプレゼンテーションスキルである。聴衆の心を掴む、ユーモアたっぷりな Dr. Moseley の講義スタイルは強く印象に残っている。

2. 日米の診療放射線技師の違い

日本は全てのモダリティを扱うことができるが、アメリカでは扱う事が出来るモダリティが免許の種類によって決められている。一見、専門性が高いのではないかと思うが、ある程度全てのモダリティを知っておくことが、専門性を持って仕事をする上で重要なのではないかと私は考えている。また、アメリカでは診療放射線技師は臨床業務のみを行い、技師が研究を行うことは稀で、臨床と研究がしっかりと分離されている。さらには、撮像プロトコールを決定する上でも、米国ではプロトコール委員会というものがあり、そこで決められた通り技師は撮像することになる。日本における臨床と研究の両立性こそが日本の診療放射線技師のレベルアップにつながっていると感じた。

3. 診療放射線技師の国際的視野

私は国際的視野を持つということは先端技術の収集と研究・創造による情報発信だと考える。日本における学会のみならず、国際学会にも積極的に参加し海外にも目を向けることから始まると考えている。その一端としても、今回の研修は大変良い機会であったと同時に、診療放射線技師がグローバルに活躍するためにも国際的視野を持つことの重要性を大いに学んだ。日本がアジアのリーダーとして、医療のあまり普及していない東南アジアへの教育や整備に貢献していくかなければならないと感じた。

4. 本研修での経験を今後の活動にどのように活かすのか

本研修において言葉では表せない程の多くの貴重な経験をさせて頂いた。その中でも特に広い視野を持つことと英語力の必要性を強く感じた。また、考え方は異なるが、同じ志を持った 8 期生の皆様と 1 週間同じ時間を共有でき、深夜までディスカッションした事を誇りに思うとともに、自分自身の考え方を再考する良い機会であった。この 1 週間で得た事を臨床業務や研究活動に少しでも還元できるように努め、後輩達に伝えていければと思う。また、この経験を活かすことができる道も探していきたいと思う。

最後になりましたが、本研修にご尽力頂いたスタンフォード大学の講師の先生方とスタッフの皆様、GEHC-J の皆様、またこのような機会を与えて下さった JSRT の関係者の皆様、我々 8 期生を上手くまとめて頂いた北里大学 佐藤様に深謝するとともに、本研修の参加に快諾して頂いた神戸大学医学部附属病院放射線部諸氏に厚くお礼を申し上げます。



スタンフォード大学病院の技師さんと筆者